

日本三大聖天「妻沼聖天山」

妻沼公民館 柿沼武久

縄文時代に端を発する長い歴史を持つ妻沼には、古社、名刹が数多く存在しています。

なかでも日本三大聖天の一つに数えられる「妻沼聖天山」は、治承三年（1179）、長井荘司斎藤氏の三代目斎藤別当実盛公が、自己の守り本尊の大聖歡喜天を祀って聖天堂と称し、長井荘の総鎮守としたのに始まるとされます。

その後、実盛の子・実長（良応僧都）らが、聖天堂の修復と別当寺院建立の請願をたて、建久八年（1197）に本堂を修復し、さらに歡喜院長楽寺を建立しました。歡喜院に十一面観音を本尊として安置しました。一方、環内中央に歡喜尊天を記した「御正体錫杖頭」を奉納して、聖天堂の本尊としたとされています。

現在の聖天堂（本堂）は、二十五年間の歳月を費やして、宝暦十年（1760）に完成したもので、建築・彫刻・彩色が調和した装飾建築の傑作として評価され、本尊の「錫杖」、威容を誇る「貴惣門」とともに、国の重要文化財に指定されています。

また、この他「福河庄」の存在を示す南北朝時代の「鰐口」や中国製の絹織物「紵絲斗帳」等、貴重な文化財が数多く残されています。

完成後二百五十年を迎えようとしている聖天堂は、平成十五年から六カ年計画で十一億円余の経費をかけ、本格的な修理工事を行っています。

日本の装飾建築の粋を集めた聖天堂（本堂）を傷みから守り、美しく蘇らせるための国の補助事業である今回の修理工事は、工事内容、経費から見ても日本屈指で、正に「平成の大修理」とも言うべき一大事業でしょう。



(熊谷市公連だより 第1号 平成18年より)